

3.4 1次独立, 基と次元

3次元のベクトルについて「1次独立, 基底, 次元」を考えた。線型空間においても同様のものを考える事ができる。

定義 3.10 線型空間 V のベクトル v_1, \dots, v_s が次の性質をもつとき **1次独立** (linearly independent) であるという: 即ち「スカラー c_1, \dots, c_s に対し

$$c_1 v_1 + \dots + c_s v_s = \mathbf{0}$$

が成立していれば $c_1 = \dots = c_s = 0$]

演習問題 3.10 次のベクトルの組が1次独立かどうか調べよ。

$$(1) \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 2 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 2 \\ 0 \\ a \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 4 \\ b \\ 2 \end{pmatrix} \text{ ただし } a, b \text{ は各自の出席番号の下2桁と1桁。}$$

$$(2) \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \\ 4 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 2 \\ 3 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 2 \\ q \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \\ p \end{pmatrix} \text{ ここで } p, q \text{ はある定数。}$$

定義 3.11 一般の線型空間 V に対し次の性質をもつベクトルの組 $\{v_1, \dots, v_n\}$ が存在する時これをこの線型空間の**基底** (base) と呼ぶ。

- (1) ベクトル v_1, \dots, v_n は V を生成する。即ち $V = \langle v_1, \dots, v_n \rangle$ が成立する。
- (2) v_1, \dots, v_n は1次独立である。

数ベクトル空間 \mathbf{K}^n についていえば基本ベクトル $\{e_1, \dots, e_n\}$ は基底である。

演習問題 3.11 基本ベクトル $\{e_1, \dots, e_n\}$ が \mathbf{K}^n の基底である事を示せ。

演習問題 3.12 $\begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ -1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ -1 \end{pmatrix}$ は $V = \left\{ \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \in \mathbf{R}^3 \mid x + y + z = 0 \right\}$ の基底である事を示せ。また $1, x, \dots, x^n$ は $\mathbf{R}_n[x]$ の基底である事を示せ。

数ベクトル空間でも扱った様に基底は一通りではない。例えば、ベクトル空間 \mathbf{K}^2 において $f_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}, f_2 = \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \end{pmatrix}$ とおくと定義 3.11 の (1),(2) の性質を満たす。よって $\{f_1, f_2\}$ は基底

である。 K^2 では一般に $\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2$ がお互いに相手のベクトルのスカラー倍でなければ $\{\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2\}$ は基底になる。 K^2 の基底は色々あるが個数はすべて2個である。後で示すように一般の線型空間についても基底が存在する場合、基底には色々あっても個数は一定である事が分る。そこでこの一定の数を線型空間の次元と定義したい。その前に基底の性質を明らかにするいくつかの命題を証明する。

命題 3.12 線型空間 V の元 $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_s$ が1次独立の時次の2つは同値。

(1) ベクトル \mathbf{v} に対しスカラー a_1, \dots, a_s が存在して

$$\mathbf{v} = a_1\mathbf{v}_1 + \dots + a_s\mathbf{v}_s$$

(2) ベクトル $\mathbf{v}, \mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_s$ は1次独立でない。

証明 (1) \Rightarrow (2) $\mathbf{v} = a_1\mathbf{v}_1 + \dots + a_s\mathbf{v}_s$ とすると

$$(-1)\mathbf{v} + a_1\mathbf{v}_1 + \dots + a_s\mathbf{v}_s = \mathbf{0}$$

が成立するが、 $-1 \neq 0$ なので1次独立でない。

(2) \Rightarrow (1) 1次独立でないとするどれかは0でないスカラー a, a_1, \dots, a_s が存在して

$$a\mathbf{v} + a_1\mathbf{v}_1 + \dots + a_s\mathbf{v}_s = \mathbf{0}$$

が成立する。ここで $a = 0$ とすると $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_s$ の1次独立性に反するので $a \neq 0$ 。よって移行して

$$\mathbf{v} = \left(-\frac{a_1}{a}\right)\mathbf{v}_1 + \dots + \left(-\frac{a_s}{a}\right)\mathbf{v}_s$$

が得られる。■

命題 3.12 により $\{\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n\}$ が基底であるとは極大な—つまり他のベクトルを加えると1次独立でなくなる様な—1次独立なベクトルの集合である事が分る。つまり、 $\{\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n\}$ が基底である必要十分条件は次の2つが成立する事である。

(1) $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n$ が1次独立である事。つまりスカラー a_1, \dots, a_n に対し

$$a_1\mathbf{v}_1 + \dots + a_n\mathbf{v}_n = \mathbf{0} \implies a_1 = \dots = a_n = 0$$

が成立する。

(2) 極大である。つまり、任意のベクトル \mathbf{v} に対し

$$\mathbf{v}, \mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n$$

は1次独立でない。

これは基底を見つける方法を与える。 V を線型空間とする。最初に \mathbf{o} でないベクトル \mathbf{v}_1 を持つてくる⁽¹²⁾。次にベクトル \mathbf{v} で \mathbf{v}, \mathbf{v}_1 が 1 次独立なものを探す。 $\langle \mathbf{v}_1 \rangle = V$ ならこの様なベクトルが存在せず、 $\{\mathbf{v}_1\}$ が基底になる。 $\langle \mathbf{v}_1 \rangle \subsetneq V$ のとき、1 次独立なものが存在するので、それを \mathbf{v}_2 とする。次にベクトル \mathbf{v} で $\mathbf{v}, \mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2$ が 1 次独立なものを探す。 $\langle \mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2 \rangle = V$ のとき、この様なベクトルが存在せず、 $\{\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2\}$ が基底になる。 $\langle \mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2 \rangle \subsetneq V$ のとき 1 次独立なものがするので、それを \mathbf{v}_3 とする。次にベクトル \mathbf{v} で $\mathbf{v}, \mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2, \mathbf{v}_3$ が 1 次独立なものを探す。この操作を続けていく。線型空間が有限次元⁽¹³⁾ であればこの操作はいつかは終わる。終わらない場合もある。例えば $\mathbf{R}[x]$ はその例である。 $\mathbf{v}_0 = 1, \mathbf{v}_1 = x, \dots, \mathbf{v}_n = x^n, \dots$ といくらいつても終わらない。この場合線型空間は無有限次元⁽¹⁴⁾ であるという。

演習問題 3.13 ベクトルの組 $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n$ が 1 次独立である事と次は必要十分である。「任意の $i = 1, \dots, n$ に対し、 $\langle \mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_{i-1} \rangle \subsetneq \langle \mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_{i-1}, \mathbf{v}_i \rangle$ が成立する。ただし、 $\langle \rangle = \{\mathbf{0}\}$ とする。

次元を定義するためには次の定理が必要になる。

定理 3.13 $\{\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n\}, \{\mathbf{f}_1, \dots, \mathbf{f}_m\}$ を V の 2 つの基底とすると $m = n$ である。

定理 3.13 を示すために次の補題を用意する。

補題 3.14 $\{\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n\}$ を線型空間 V の基底とする。 $\mathbf{f}_1, \dots, \mathbf{f}_r$ が 1 次独立の時 ($r \leq n$) $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n$ の番号を適当につけ変えると

$$\{\mathbf{f}_1, \dots, \mathbf{f}_r, \mathbf{v}_{r+1}, \dots, \mathbf{v}_n\}$$

は V の基底となる。

証明 r についての帰納法で示す。

(1) $r = 1$ の時。 $\{\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n\}$ は基底なのでスカラー a_1, \dots, a_n が存在して

$$\mathbf{f}_1 = a_1 \mathbf{v}_1 + \dots + a_n \mathbf{v}_n \tag{1}$$

と書ける。すべての i について $a_i = 0$ なら $\mathbf{f}_1 = \mathbf{o}$ で \mathbf{f}_1 の 1 次独立性に矛盾。 $a_i \neq 0$ となる i が存在するが適当に番号を付け替えて $a_1 \neq 0$ としてよい。この時

$$\mathbf{v}_1 = \frac{1}{a_1} \mathbf{f}_1 + \left(-\frac{a_2}{a_1}\right) \mathbf{v}_2 + \dots + \left(-\frac{a_n}{a_1}\right) \mathbf{v}_n$$

と書ける事に注意しておく。これを

$$\mathbf{v}_1 = b_1 \mathbf{f}_1 + b_2 \mathbf{v}_2 + \dots + b_n \mathbf{v}_n$$

と書き直しておく。さて $\{\mathbf{f}_1, \mathbf{v}_2, \dots, \mathbf{v}_n\}$ が基底になる事を示す。 V の任意のベクトル \mathbf{v} に対しスカラー c_1, \dots, c_n が存在して

$$\mathbf{v} = c_1 \mathbf{v}_1 + c_2 \mathbf{v}_2 + \dots + c_n \mathbf{v}_n$$

⁽¹²⁾ここで注意： \mathbf{o} でないベクトルが存在しない場合がある。 V が零ベクトルのみからなる線型空間 ($V = \{\mathbf{o}\}$) の場合である。この場合 0 個の基底が存在すると思ひ 0 次元という事にする。

⁽¹³⁾きちんとした定義はあとでやる。→ 定義 3.15

⁽¹⁴⁾無限次元空間は量子力学等で大切ではあるが、この講義においてはほとんど取り上げない。

と書ける。このとき

$$\begin{aligned} \mathbf{v} &= c_1(b_1\mathbf{f}_1 + b_2\mathbf{v}_2 + \cdots + b_n\mathbf{v}_n) + c_2\mathbf{v}_2 + \cdots + c_n\mathbf{v}_n \\ &= c_1b_1\mathbf{f}_1 + (c_1b_2 + c_2)\mathbf{v}_2 + \cdots + (c_1b_n + c_n)\mathbf{v}_n \end{aligned}$$

と表す事ができる。次は 1 次独立性を示す。

$$c_1\mathbf{f}_1 + c_2\mathbf{v}_2 + \cdots + c_n\mathbf{v}_n = \mathbf{o} \quad (2)$$

とする。式 (2) に式 (1) を代入すると

$$c_1(a_1\mathbf{v}_1 + \cdots + a_n\mathbf{v}_n) + c_2\mathbf{v}_2 + \cdots + c_n\mathbf{v}_n = \mathbf{o}$$

これを整理すると

$$c_1a_1\mathbf{v}_1 + (c_1a_2 + c_2)\mathbf{v}_2 + \cdots + (c_1a_n + c_n)\mathbf{v}_n = \mathbf{o}$$

1 次独立性より $c_1a_1 = 0$ 。 $a_1 \neq 0$ より $c_1 = 0$ が得られる。 $c_1 = 0$ のとき $\mathbf{v}_2, \dots, \mathbf{v}_n$ の 1 次独立性より $c_2 = \cdots = c_n = 0$ 。 よって 1 次独立も示された。

(2) $r = s$ の時成立を仮定して $s + 1$ の時の成立を示す。

$$\{\mathbf{f}_1, \dots, \mathbf{f}_s, \mathbf{v}_{s+1}, \dots, \mathbf{v}_n\}$$

は V の基底になっているので、 \mathbf{f}_{s+1} に対しスカラー a_1, \dots, a_n が存在して

$$\mathbf{f}_{s+1} = a_1\mathbf{f}_1 + \cdots + a_s\mathbf{f}_s + a_{s+1}\mathbf{v}_{s+1} + \cdots + a_n\mathbf{v}_n \quad (3)$$

と表す事ができる。 $a_{s+1} = \cdots = a_n = 0$ だと $\mathbf{f}_1, \dots, \mathbf{f}_{s+1}$ の 1 次独立性に反する。 $a_i \neq 0$ となる i ($s + 1 \leq i \leq n$) が存在するが番号を適当に入れ替えて $a_{s+1} \neq 0$ としてよい。この時

$$\begin{aligned} \mathbf{v}_{s+1} &= \left(-\frac{a_1}{a_{s+1}}\right)\mathbf{f}_1 + \cdots + \left(-\frac{a_s}{a_{s+1}}\right)\mathbf{f}_s + \left(\frac{1}{a_{s+1}}\right)\mathbf{f}_{s+1} \\ &\quad + \left(-\frac{a_{s+2}}{a_{s+1}}\right)\mathbf{v}_{s+2} + \cdots + \left(-\frac{a_n}{a_{s+1}}\right)\mathbf{v}_n \end{aligned}$$

と書ける事に注意しておく。これを

$$\mathbf{v}_{s+1} = b_1\mathbf{f}_1 + \cdots + b_{s+1}\mathbf{f}_{s+1} + b_{s+2}\mathbf{v}_{s+2} + \cdots + b_n\mathbf{v}_n$$

と書き直しておく。 $\{\mathbf{f}_1, \dots, \mathbf{f}_s, \mathbf{v}_{s+1}, \dots, \mathbf{v}_n\}$ は基底なので V の任意のベクトル \mathbf{v} に対しスカラー c_1, \dots, c_n が存在して

$$\mathbf{v} = c_1\mathbf{f}_1 + \cdots + c_s\mathbf{f}_s + c_{s+1}\mathbf{v}_{s+1} + \cdots + c_n\mathbf{v}_n$$

と書ける。このとき

$$\begin{aligned} \mathbf{v} &= c_1\mathbf{f}_1 + \cdots + c_s\mathbf{f}_s + c_{s+1}(b_1\mathbf{f}_1 + \cdots + b_{s+1}\mathbf{f}_{s+1} + b_{s+2}\mathbf{v}_{s+2} + \cdots + b_n\mathbf{v}_n) \\ &\quad + c_{s+2}\mathbf{v}_{s+2} + \cdots + c_n\mathbf{v}_n \\ &= (c_1 + c_{s+1}b_1)\mathbf{f}_1 + \cdots + (c_s + c_{s+1}b_s)\mathbf{f}_s + (c_{s+1}b_{s+1})\mathbf{f}_{s+1} \\ &\quad + (c_{s+2} + c_{s+1}b_{s+2})\mathbf{v}_{s+2} + \cdots + (c_n + c_{s+1}b_n)\mathbf{v}_n \end{aligned}$$

と表す事ができる。次は 1 次独立性を示す。

$$c_1 \mathbf{f}_1 + \cdots + c_{s+1} \mathbf{f}_{s+1} + c_{s+2} \mathbf{v}_{s+2} + \cdots + c_n \mathbf{v}_n = \mathbf{o} \quad (4)$$

とする。式 (4) に式 (3) を代入すると

$$c_1 \mathbf{f}_1 + \cdots + c_s \mathbf{f}_s + c_{s+1} (a_1 \mathbf{f}_1 + \cdots + a_s \mathbf{f}_s + a_{s+1} \mathbf{v}_{s+1} + \cdots + a_n \mathbf{v}_n) \\ + c_{s+2} \mathbf{v}_{s+2} + \cdots + c_n \mathbf{v}_n = \mathbf{o}$$

これを整理すると

$$(c_1 + c_{s+1} a_1) \mathbf{f}_1 + \cdots + (c_s + c_{s+1} a_s) \mathbf{f}_s + (c_{s+1} a_{s+1}) \mathbf{v}_{s+1} \\ + (c_{s+2} + c_{s+1} a_{s+2}) \mathbf{v}_{s+2} + \cdots + (c_n + c_{s+1} a_n) \mathbf{v}_n = \mathbf{o}$$

1 次独立性より $c_{s+1} a_{s+1} = 0$ 。 $a_{s+1} \neq 0$ より $c_{s+1} = 0$ が得られる。 $c_{s+1} = 0$ のとき $c_1 = \cdots = c_n = 0$ が得られ 1 次独立も示される。 ■

さて定理 3.13 の証明をしよう。 $n < m$ と仮定する。補題 3.14 を用いて基底 $\{\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n\}$ を置き換えていくと $\{\mathbf{f}_1, \dots, \mathbf{f}_n\}$ が基底である事が分る。この時 \mathbf{f}_{n+1} は $\mathbf{f}_1, \dots, \mathbf{f}_n$ で表す事ができるので 1 次独立性に矛盾。よって $n \geq m$ 。 $\{\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n\}$ と $\{\mathbf{f}_1, \dots, \mathbf{f}_m\}$ の役割を入れ替えると同様に $n \leq m$ も示す事ができる。故に $n = m$ が得られる。 ■

定理 3.13 より次の定義が許される。

定義 3.15 K 上の線型空間 V が n 個のベクトルからなる基底

$$\{\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n\}$$

を持つ時この線型空間 V の (K 上の) **次元** (*dimension*) は n であるという。この次元を $\dim_K V$ と表す。 K が明らかな時は省略して $\dim V$ と書く。またこの時線型空間 V は有限次元であるという。有限個の基底を持たない時無限次元という⁽¹⁵⁾。量子力学では無限次元複素線型空間を取り扱う事が必要になるが、この講義では有限次元空間を中心に扱う。

⁽¹⁵⁾‘無限個の基底’という概念もあるがこの講義では取り扱わない。